

高校英語授業のお悩みQ&A

「英語が使える生徒」を生み出すためには授業におけるアウトプット活動が欠かせないと思います。しかし、限られた授業時間の中で、どこまでアウトプット活動に時間をかけられるのでしょうか。進学校のスピーキング活動はどうあるべきだと思いますか。

取材・撮影_応援マガジン編集部

木村先生 今は高校1年生を受け持っていますが、彼らには与えた例文の単語をどんどん入れ替えていき、口頭英作文させています。例えば「もし僕が君だったら、あんなばかなことはしないのに」という例文なら「もし僕が君だったら、毎月もっと本を読むだろうに」といったように、単語を入れ替えていきながら「もし僕がお母さんだったら、お父さんにもっとお小遣いをあげるのに」というところまでもっていきます。生徒にはこの流れでひたすらスピーキングをさせ、最後にスピーキングした英文を紙に書かせるようにしています。長文指導においても「教員から生徒へ」という一方通行にならないように、生徒にどんどん質問を投げ掛け、英語で答えさせていきます。この活動では生徒としっかり向き合って会話することができますし、この間、他の生徒は二人の会話をしっかりリスニングしています。この他、週に1回、ペアワークで歴史上の人物や文化財などについて英語で説明するクイズも行っています。大阪城を説明するなら“This is a castle in Osaka.”では当然駄目です。せめて“This is one of the most famous castle in Japan.”まで言ってもらいたいですが、こうしたクイズ形式の英問英答でも文法ベースで徹底的に繰り返しアウトプットさせてきた効果を実感できますよ。単語はもちろん、生徒に表現ベースを蓄積させなければ、英語でうまく説明できませんからね。

庄末先生 授業では二人一組で音読したものを自分の身近なものに置き換えて、英語で説明させる英作文を宿題にすることがありますが、いずれはディベート教材で扱ったものをスピーキングに生かせればと思っています。

木村先生 先日、生徒が兵庫県英語ディベート大会で優勝しま



木村達哉先生
(灘中学校・高等学校 教諭)

庄末 剛先生
(北海道札幌旭丘高等学校 教諭)



したが、これまでにディベートの特別な指導をしたわけではなく、ちょっとした活動の積み重ねの成果だと思っています。教科書の音読でも「もっと声を出せ」「抑揚を大きく付けて話せ」としつこく習慣付けさせています。音読・暗唱した英文は大勢の観衆の前で話すイメージで読ませるんです。こうすることで、生徒に人前で堂々と話をするのできる資質が出来上がります。高校3年生になると自由英作文の対策も必要になりますが、生徒には大学入試のために必要な力と同時に、自分の意見を英語で、そして大きな声で発信できるようにしてあげることが大切なのではないでしょうか。

庄末先生 アウトプットのためにはインプットが大事ですが、インプットだけだと定着しない。生徒には単語も意味だけではなく、「実際にどう使われるか」もしっかりと伝えていかなければなりません。そのためにもやはり教員自身の研さんが必要ですね。

木村先生 日本語でもそうですが、会話では同じ動詞ばかり使いませんよね。いろいろな言葉や表現を使うからこそコミュニケーションは楽しいのに、意味ばかりを教えたり、「生徒が戸惑うかもしれない」という不安から

単一の表現しか生徒に教えないのでは、いつまでたっても生徒にアウトプットする意味や楽しさを伝えることはできません。まずは教員自身がいろいろな言葉を知り、それを生徒に遠慮せず授業で使って、しっかりと教えていかなければならないのではないのでしょうか。英語が使える生徒を生み出すためには、音読や暗唱の前に文法ベースで確かな下地を作り、単語や表現をどんどん入れていかなければなりません。この力を付けさせてあげることこそ、われわれ教員の役目だと思っています。

「キムタツの英語教師塾 in 応援マガジン」連載終了と新連載スタートのお知らせ

『英語の先生応援マガジン2010春号』より連載してまいりました「キムタツの英語教師塾 in 応援マガジン」は、今号をもちまして、連載を終了することとなりました。これまでのご愛読、誠にありがとうございました。「キムタツの英語教師塾 in 応援マガジン」は、木村先生が全国で開催する高校の英語科の先生向け勉強会「英語教師塾」の誌上版として、木村先生と一緒に全国の高校で授業見学をさせていただき、その模様をレポート。読者の先生方からも「他校の授業の様子が分かって参考になる」と好評のコーナーでしたが、内容をリニューアルし、読者の先生方に一層興味を持って読んでいただけるコーナーにしていきたいと思います。新しい連載でも引き続き、木村先生にご登場いただく予定です。次号（『英語の先生応援マガジン2012夏号』）から始まる新しいコーナーにぜひ、ご期待ください（「高校英語授業のお悩みQ&A」は、次号以降も連載してまいります）。

